

猿沢池のシダレヤナギの現況および今後の進め方の報告

猿沢池のシダレヤナギ枯損について、当委員会への報告(H24年度)ならびに検討を受けて、H25～26年に全面的な整備を行った。

しかし、その後も枯損が発生したため、公園事務所により試験的に様々な対策が行われたものの歯止めはかからず、R6年7月に最後の生存木の枯死が確認された。

これをうけ、R7年度より、調査とともにどのような取り組みの方向性があるのかについて調査検討を行うことを予定している。

(1) 経緯

H24 ・シダレヤナギの度重なる枯損の報告。

H24 ・土壌調査を実施。結果、問題なし。

・樹木医（宗實氏、中沢氏）2名が調査し、ナラタケ病と推察。

・森林総研がナラタケモドキと同定。

・宗實氏他の提案をもとに、全面的な土壌入替と木炭資材及び微生物資材による遮断層を設置する設計を行う。

H25～26 2年間で植替施工。樹木医による樹木材料検査と現地指導を行う。

H28 ・再びシダレヤナギの枯損が始まる。

H29 ・公園事務所が径500のスパイラルチューブによる試験的植替を実施。

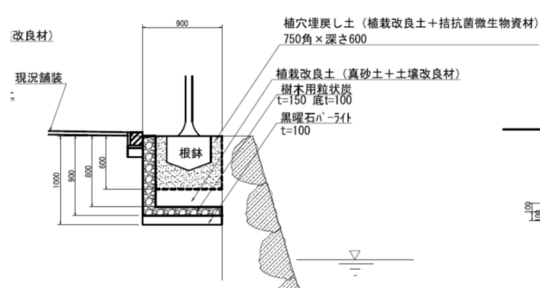
H30～・都度様々な資材を利用して、植替を試みる。

R6.7 ・最後の生存木が枯死。

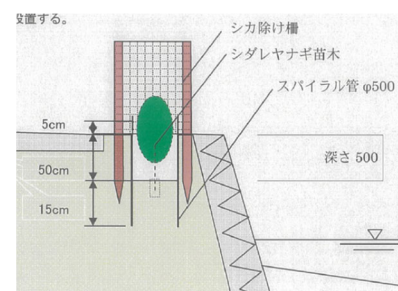
【履歴】

年	月	植え替え	枯死・伐採	生存木	備考
H24				3	
H25		16		19	・全面的土壌入替、遮断層設置等
H26		10		29	・植栽帯の拡大
H27				29	
H28			11	18	
H29	3	11		29	・スパイラル管埋込 ・これまでと異なる地域で生産された苗の植栽 ・精鋭苗の植栽
H30	6		1	28	
H31(R1)	6		6	22	
R2	4			22	
R3	10		12	10	
R4	4		2	8	
	11		3	5	
R5	6		4	1	
R6	7		1	0	

【H25～26 施工方法】



【H29 施工方法】



（２）猿沢池の現況（写真は全て R6.10.29 撮影）



現在の猿沢池の様子。スパイラルチューブ(自動灌水装置付)のほか、さらに外側に空壁を設ける方法なども試行されたが、効果は見られなかった。

（３）ナラタケモドキの防除の現状

- ・ナラタケモドキは、地下部に残った根の残渣で長期間生存
- ・防除には伝染減を物理的に除去、もしくは死滅が必要
- ・薬剤による化学的防除が有効であるが、登録薬剤はない。

ならたけもどき病は、ナラタケモドキ (*Desarmillaria tabescens*) を病原とする根株腐朽病害である。本菌は多犯性で、特に街路樹や公園の緑化木などの被害が問題となっている。ナラタケモドキは、罹病した樹木の伐根や地下部に残った根の残渣で長期間生存可能で、それらが伝染源となることから、防除には伝染源を物理的に除去するか、死滅させる必要がある（太田 2006）。そのためには薬剤を用いた化学的防除法が有効であるが、現時点ではならたけもどき病に適用可能な登録薬剤はない。必

出典：土壌中のナラタケモドキに対する薬剤 2 種と低濃度エタノールによる土壌還元消毒の効果（抜粋） 加藤・村田・後藤・太田・門馬・小原 「樹木医学」

（４）R7 年度以降の調査検討の進め方（案）

① 植替後枯死の原因調査

微生物遮断層設置等の対策後、並びにスパイラル管による植替後も短期で枯死する状態が継続している。現在枯死している樹木を対象に、これらの枯死原因がナラタケモドキ病によるものか、その他の理由によるものか、樹木医や植物病理の専門家による調査を行う。

② ナラタケモドキ菌の撲滅・削減方法の検討

対象地の土中に残存していると考えられるナラタケモドキ菌の撲滅・削減の方法について、専門家（植物病理学や樹木医、植物医師を想定）による対応案の検討を行う。

③ ナラタケモドキ菌の影響を受けない植栽方法の検討

対象地の土中にナラタケモドキ菌が残存していても、樹木が生育できる植栽方法（物理的遮断、植栽位置変更、大型プランター、ナラタケモドキ病が発病しにくい別樹種など）を検討する。

④ 基本的な方針の検討

同樹種の植替を繰り返すことにより引き起こされた病害への対応について、長期的な視点からどのような取り組みを行うべきかを検討する。